札響くらぶ

第10号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

楽団員・くらぶスタッフ 初の懇談会

第２回コンサート実施へ

初めての札響楽団員と札響くらぶ運営スタッフとの懇談会が、８月25日夕刻、教育文化会館の会議室で開催されました。これまでも、事務局を通しての折衝や、コンサートに関する代表同士の話し合いなどはありましたが、一堂に会しての懇談会は初めての試みです。

楽団員の皆さんにとっては貴重な夏休み中にもかかわらず、ヴィオラの物部憲一さん、打楽器の大垣内英伸さんと真貝裕司さんの３人が出席して下さいました。

懇談会のテーマは、札響くらぶと楽団員のこれまでの交流を踏まえ今後どう発展させるか、「第２回札響くらぶコンサート」についての意見交換の２点でした。

楽団員の皆さんからは、楽団員の中でも札響くらぶに対する考えは必ずしも一致していない、中には交流会等でプライベートな時間をつぶしてほしくないという意見もあるなど、かなり内情に踏み込んだ話もあり、くらぶ側としても、ファンなのだから、支えてやっている、というような甘えや傲慢に流されていなかったかと考えさせられました。

「くらぶが先走って、なぜ楽員は理解しない、という形にはなってほしくない」、「日本中のオーケストラが、どうファンを引き付けるかに深刻に悩んでいる中、札響くらぶの存在は大切」などの楽団員の貴重な意見も出され、今後、大垣内さんを楽団員側の窓口とし、一層の相互理解を深めていくことになりました。

「第２回札響くらぶコンサート」についても話し合われ、「弦楽合奏やブラスバンドみたいな演奏」「小ホールで家族的なコンサート」等々、様々な意見が出ましたが、「せっかくフルオーケストラでやったのだから継続を」という意見で一致。これについても、今後、両者が連携をとりながら煮詰めることになりました。

楽団員の皆さんの協力で、初めてにして、有意義な懇談会でした。

指揮者にきく

音楽は自然の流れの中で その流れをつかむこと

東京都交響楽団首席客演指揮者

小泉 和裕 さん（こいずみ かずひろ）

小泉和裕さんのプロフィール

1969年東京芸大指揮科に入学、山田一雄氏に私事。翌年第２回民音指揮者コンクール１位。72年新日フィル創立に指揮者として参加。同年、ベルリンのホッホシューレに入学。73年、タングルウッド音楽祭に参加。同年11月には第３回カラヤン国際指揮者コンクールに１位入賞、ベルリンフィルを指揮してベルリン・デビューを飾った。75年新日フィルの音楽監督に就任。同年、ベルリンフィルの定期演奏会に出演し、好評を博した。その後、ウィーン、パリ、イタリア、西ドイツの各地を回り、76年にはフランス国立放響で、ルービンシュタイン、ロストロポーヴィッチと協演し、絶賛を博した。その後、ヨーロッパ、アメリカ、カナダで精力的な指揮活動を行なう。国内では、東京都響首席指揮者、九響首席指揮者を務め、現在は東京都響首席客演指揮者を務める一方で、各オーケストラの客演指揮者として活躍している。

―― 小泉さんは東京都交響楽団を中心に活躍される一方で、田畑を耕作するという自然派の生き方をされていると伺っていますが。

小泉　話せば長くなるのですが、平成元年に岐阜県高山の近くに農家を譲ってもらい、自分で１年間に食べるだけの米や野菜は自分で作っています。どうしてそういうことをすることになったかというと、東京芸大の半ばからベルリンに留学し、カラヤンコンクールを経てベルリンフィルでデビューし、その後、海外生活でのホテル住まいが長く、お金を出せばおいしい物は食べられるけれども、何か味気ない。日本に戻ってきて、日本の自然を求めてあちこち歩いているうちに、自分の食べるものくらい自分で作ってみたいと思うようになったのです。

―― 10年も続けられているのは、農作業が楽しいからでしょうか。

小泉　もともと遺伝子組み換え食品とか農薬とかは好きではありませんし、形が悪くても自然のものは美味しいということを知ってしまったこと、そして、やはり農作業というのはカルチャーだと思いますね。音楽を作って行くのと同じように楽しいんですよ。

あんなに小さい種子が、自然の中で大きく育って行くダイナミズムは、オーケストラで楽員の力を引き出しまとめあげて行く音楽作りによく似た楽しさがあると思います。

―― 音楽作りにおいて、自然を大切にするという考え方が基礎にあるということでしょうか。

小泉　そういうことです。私の音楽の発想は、自然の流れの中で、その流れをつかんでやって行こうということにあります。ですから、楽員の方にも音楽を自然の流れのなかで大切にしてほしいと求めているのです。

―― 札響では20年ほど前から、度々指揮をされていらっしゃいますが、最近の札響に対するご感想はいかがですか。

小泉　そうですね、私の20歳代の終わり頃から30代前半頃まで頻繁におつき合いさせていただきましたが、その後、九州交響楽団の仕事とのかねあいもあり、少し離れておりました。

少し間をおいて札響を指揮してみますと、演奏技術的にはうまくなっているというのが印象です。どんな曲でもこなすことが出来る演奏技術レベルは備わったという意味で、良いことだと思います。しかし、音楽とは何なのか、ということを考える土壌というか下地

というか、そこの所はまだ仕込まれていないのではないか。芸術の森という自然環境に恵まれたところに練習場が確保され、KITARAという素晴らしいホールに恵まれ、音楽をする条件は整ったと思いますので、これからが本当の勉強だと思います。

―― 音楽の土壌・下地というのをもう少しわかりやすく教えていただけますか。

小泉　札響には目立つような悪い所はない。しかし、モーツァルトでもベートーベンでもブラームスでもその型としてきちんとしたものがある。いつ演奏してもベートーベンやモーツァルトのメッセージをきちんと伝えることが出来る。どのようなバランスやアンサンブルで演奏するのがよいのか。その場限りの演奏ではない。そんなことが出来るオーケストラとなるための勉強が必要となるとおもいます。

もっと具体的にいうと、経験豊かな団員が若い団員に、このオーケストラのアンサンブルをきちんと教え伝承する、そんな雰囲気がオーケストラのなかに根付くことが必要だと思います。

―― 素人の質問で恐縮ですが、小泉さんはどんな作曲家の演奏を好まれるのですか。

小泉　プロの演奏家としては、聴いていただいて評価を受ける立場ですから、自分からこれが得意だということは言えないのです。

ただ、オーケストラの演奏にとって最も基本であるのは、クラシックのシンフォニーです。中でも、ベートーベンは、オーケストラにとっても、指揮者にとっても、バイブル的存在なんですね。私はベルリンで勉強したこともありますが、ベートーベンをちゃんと演奏出来るように、一生、ベートーベンに何度もチャレンジして、自分の音楽を作って行きたいと思っていますね。

―― 「札響くらぶ」は、札響が市民により身近な存在になり、リスナーが増えて行くことを目指した活動を行っておりますが、小泉さんのお立場から、私たちの活動にアドバイスをいただければありがたいのですが。

小泉　オーケストラにとって、聴衆がたくさんいてくれるということは、あらゆる意味で大切なことですので、札響くらぶの活動は本当に素晴らしいと思います。

特に、先に行なわれた「札響くらぶコンサート」ですか、子どもたちが大勢参加したとのことですね。将来の札響を考えると、子どもの時に出来るだけ美しい音楽に触れさせてあげることが大切だと思いますので、是非頑張っていただきたく思います。そして、長い目で札響をお聴きいただき、長く楽しんでいただきたいものと希望しております。

―― お疲れのところ、ありがとうございました。

（9月11日午後5時、パークホテルにて
インタビュアー　上田文雄）

追悼

戸沢宗雄氏ご逝去

去る８月26日、前札響首席ファゴット奏者、コンサートリーダーとして成長期の札響に多大な貢献をされ、多くのファンに強烈な印象を残された戸沢宗雄氏がご自宅のある函館で逝去されました。戸沢氏を追悼し、氏の愛弟子で、現札響首席ファゴット奏者一戸哲さんに在りし日の思い出を語っていただきました。

先生に初めてお会いしたのは、私が中学校３年生の時でした。

当時、父の仕事の関係で、広島に住んでいましたが、たまたまフルートの林りり子先生が広島に演奏にいらっしゃり、私の母が林先生と親しい友人だったので、「この子、サラリーマンにはむかないと思うんだけど」と相談したわけです。林先生は即座に「わかった。私がいい先生紹介してあげるから」と紹介されたのが戸沢先生でした。

当時、先生は日フィルにいらっしゃっり、私は中野のご自宅に広島から２か月に１度くらい通いました。私は、とにかく東京に行けるのがうれしく、また、ファゴットという初めての楽器がめずらしくもあり、吹いていても楽しくて仕方ありませんでしたから、先生の出される課題以上の練習をして行きました。先生も喜んでくれて、最初の１年間はやさしくて、怒られたりすることはありませんでした。

翌年、本格的に先生に学ぶため桐朋に入学しました。その頃からエチュードが難しくなり、先生も徐々に厳しくなり、しまいには文字通り怒鳴りまくられるようになりました。私に「オレは将来のプロしか教えない。お前プロになるんだろうな」と言われ、私は、恐ろしい人だなと思いました。

先生のレッスンは、とにかく厳しいの一語に尽きるようなものでした。先生は自分に対して非常に厳しい方で、その分人に対しても厳しかったのだと思います。まったくの職人気質の方で、「それじゃだめだ、帰れ！」の一言だけで、どこがどうだめだなんてことは一言もおっしゃらない。自分で考え、自分で答えを出すことを常に求められました。正に昔の職人のように、親方は何も教えない、弟子は親方の技を盗めといったあんばいでした。後に作陽音楽大学教授になられてからも、学生に対して「いいから吹け」と言うのが口癖で、学生達から「いいから先生」と呼ばれていたそうで、いかにも先生らしいなと思いました。

先生を知る人達は口をそろえて、「厳しい人、怖い人」と言いますが、その本質は、人情家でやさしい人だったと思います。先生はよく「オレは弟子はとりたくない。だって、面倒見なきゃならねぇからな」とおっしゃっていました。自分が教えた弟子は独り立ち出来るまで面倒を見る、そういう昔気質の方で、表面はいかにもぶっきらぼうに見えて、心の中はあたたかくやさしい方でした。私を札響に呼んでくれたのも、そんな先生のお気持ちからだと感謝しております。

私が札響に入団して、師弟が並んで演奏することになりましたが、内心、えらいことになったと思いました。オケの中で、「遅い！」「速い！」「大きい！」「小さい！」「高い！」「低い！」などと常に言い続けられました。「ベースを聴け！」「チェロを聴け！」と怒られました。

札響ではコンサートリーダーとして演奏していました。先生は回りの音をよく聴いて、音を一つにまとめる中心にいた方でした。実は、オーケストラにとっては、この音を一つにまとめるということが非常に重要で、それを札響の伝統にした人と言って良いと思います。楽員の中には反発する気持ちを持った人もいたかもしれませんが、先生は何事もずけずけ言う方なので皆が従わざるをえなかったのだと思います。そして、それが結果として札響の音を作った。間違いなく、札響の一つの時代の中心に居た人だと思います。

両端先生御夫妻、中央私達夫婦

作陽音楽大学を退職されてから、海と山のある函館が気に入って住まわれましたが、毎年お伺いする度に、リードを直してもらったり、先生の作られたリードをいただいたりしました。私にとっては最後の最後まで師匠でしたし、かわいがっていただきました。

実は、昨年私の父が亡くなりまして、私としては２年続けて父を亡くしたような、痛恨極まりない気持ちでおります。

心から先生のご冥福をお祈りいたします。

札響物語　XI

道　内　公　演　1

札幌にお住いの方には道内の地名を聞いても、所在地がお分かりにならない方が多いのではないでしょうか。今や、札響事務局は一番の北海道通でしょう。

道内や道外に札響の人気が急に高まったのは、昭和53年９月３日に初めてのグリーンコンサートを道庁赤レンガ庁舎の前で行なってからです。午前中、野幌の開拓記念館で道内212市町村の市町村長が集まって開道120年の式典が持たれました。

グリーンコンサートについては別にお伝えしますが、その午後２時に赤レンガ庁舎前で第１回目のグリーンコンサートが開かれ、そこへ当時の堂垣内知事を始め212市町村長が立ち寄ったのです。会場は庁舎の塀の外にまで３万人の聴衆があふれていました。これを見た212市町村長達は「北海道は札幌だけではない」と知事に迫り、翌年から道内５会場で展開されることになりました。また、この演奏会の模様は道内ではすべての新聞の一面にカラー写真で載り、ＮＨＫも民放も一斉にテレビニュースで全国に伝えました。

これ以来、札響の道内公演は急増し、20周年の昭和56年から始まった文化庁移動芸術祭に繋がりました。

札響が初めて札幌以外の町で一般公演をしたのは栗山町でした。空知平野の中にある栗山町はとても進取の気性に富んでいる町で、第１回定期演奏会が開催された翌月に児童生徒を対象にした音楽教室と一般のための演奏会を催しています。最近でも「雛祭りコンサート」として、３月３日前後に毎年公演があります。

近年の会場は栗山町スポーツセンターで、片方の壁の前に仮設のステージを設えます。仮設のステージはビール瓶を運ぶコンテナを敷き詰めて、その上にコンパネを張って造られる間口18m、奥行き10.8mのものです。ステージの後ろ側には折り畳み・可動式の反響板を並べます。スポーツセンターは上等な仕上げの床が命なので、客席になるアリーナにはゴムシートを敷き、その上に800脚の折り畳み椅子を並べます。これは字づらからは計り知れない大作業で、例年、青年会議所のメンバーが人海戦術で作業を行ないます。

広い北海道は移動も大変なのですが、楽団員も道内公演は真剣に取り組み、各地で感動を共にしていただき、「我が町の札響」と親しまれるよう努力を続けています。

（竹津宜男）

オーケストラなんでもQ&A

Q. 定期演奏会のプログラムの、札響の楽団員名簿にある「インスペクター」というのは何をする人なのですか。

A. 「インスペクター」は辞書に監督官などと書いてあります。オーケストラを代表して指揮者と練習曲目の編成、順序や時間の打ち合わせ、楽団員の出番・降番の確認など楽団の運営上の管理をする人です。時にはきついことも言わねばならず、冗談に、辞書には「嫌われ役」と書いてあると言われます。

Q. 奏者によって、４弦と５弦のコントラバスが使われていますが、音域の違いとかパートの違いとかがあるのでしょうか。

A. 通常は４弦で、最低音はピアノの真ん中から３オクターブ下のミの音まで出ます。18世紀まではチェロの１オクターブ下を弾くだけでしたが、ロマン派以降独立した働きが求められ、最低音が更に３度低いドの音まで出る５弦が作られました。

両者によるパートの違いはなく、現在は、奏者の好みによって混在しています。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　首席ホルン奏者

橋本（はしもと）　敦（あつし）さん

札幌交響楽団　チェロ奏者

角野（かくの）　友則（ともので）さん

左　橋本さん　右　角野さん

今年の野外演奏会は多くが雨にたたられたそうですが、８月21日に厚別で行われたグリーンコンサートは、太陽をさえぎる雲ひとつない日射の照りかえる中での演奏会となりました。

今回は、当日の演奏終了後、お二人揃ってお話をお聞きしました。

出身地と札響の入団時期を教えてください

橋本　神奈川県横須賀市の出身で、大学は桐朋学園です。大学３年の時に札響のオーディションがあって力試しにと受けたのが合格しまして、その時は迷いましたが、結局大学を卒業せずに入団しました。修学旅行で札幌に来ていて、その時のいい印象があったのも影響したと思います。それが1978年ですので、もう21年たちました。

角野　神戸の出身です。センター試験の翌日に阪神大震災があって、マンションが半壊状態になり大変でしたが、今も家族はずっと向こうに住んでいます。

今年大学を卒業したばかりで、留学も決まっていたのですが、札響のオーディションに運良く受かったものですから(笑)、プロのオーケストラに入ることも夢でしたので、入団することにしました。この５月のことです。それまでは札響の音というのもよく知らなかったのですが、大学で尾高さんや円光寺さんとつながりがありましたし、退団なさった土田英順さんと一緒に仕事をした時に話を聞いて札響にいいイメージをもっていました。

入団までとても順調なお二人ですが、今の楽器を始めたきっかけはどうだったのですか

橋本　小学校からピアノを習っていましたが、音楽鑑賞で聴いた曲の中でも、ホルンの音が印象に残っていたり、面白い形が気になったりしていました。

中学校に入ってからブラスバンドを始めて、そこにはホルンがなかったので、ほぼ同じ音域のアルトをやりましたが、やはりホルンがほしくて親に買ってもらいました。他の金管楽器と違ってホルンは左手でバルブを押さえて、右手をベルの中に入れますが、そんな手の形も本を見て練習するという感じでした。これは昔のホルンにはバルブがなく、右手のふさぎ具合で音階を吹いていたことのなごりなのですが、今は音色を変化させるためだけに右手は使っています。また、管の長さが細くて長いのがホルンの特徴で、高い音になると指を押さえなくても様々な音程の音が出ますし、指が正しくても違う音が出てしまうこともあります。

角野　僕もピアノを３歳から習っていたんですが、10歳の時に共演したオーケストラの指揮者にチェロを始めてみないかと言われたのがきっかけで、習うことにしました。習っていた先生が音楽高校の先生だったので、その学校に入学し

てそのままきています。

北海道の印象はいかがですか

角野　最北の地での演奏となった稚内などへ出かけているなかでの印象は、やはり北海道は広いなあということです。稚内では、大勢の方に来ていただき、終了後のパーティでもお客さんと密着したつながりをもてました。こんなことは大阪ではほとんどありませんでした。

今年の夏は暑くて、神戸とあまり違わず、残念でした。早くこちらの冬を体験してみたいです。

橋本　今まで道内のあらゆる地域へ出かけてますので、いろいろ道路は覚えてしまって、それほど遠くに感じなくなりました。運転が好きな人には北海道は本当に最高ですね。

演奏家でなかったら何になっていたと思いますか

角野　僕は阪神ファンで、向こうでは追っかけのようなこともやっていたので(笑)、スポーツ新聞の記者なんかをやっていたかもしれませんね。

橋本　機械いじりとかは好きですが、どうでしょうねえ。子どもの頃は漫画家とか科学者に…なんて言っていたようですが。

仕事以外の時は何をされていますか

橋本　前はよく演奏旅行の時などにビデオや写真を撮りに出かけていましたが、今はあまりしていません。音楽もクラシックは真剣に聴いてしまって疲れるので、楽しんで聴けるジャズなどを聴いています。

角野　僕も車で聴いたりするものは同じですね。

札響ファンへひとことお願いします

橋本　今年の定期のプログラムはどうでしょうか。知らない曲ばかりでつまらないという声もあるようですが。少し残念ですね。

角野　いつも有名な曲ばかり聴くのではなく、こういう曲もあるんやって知ってもらいたいですね。

それと、ホールに空席があるのは残念ですね。演奏する側にもいい緊張感が出るよう、より多くのお客さんに来ていただきたいです。

ゆっくり聴いていられるよう終電の時間が遅くなるとよいのですが

橋本　そうですね。幌平橋と中島公園駅まで地下道でもあるといいんですが…、冬など大変ですよね。皆さんの時間の過ごし方も変わってきていると思いますので、ゆっくりと遅くまで聴いていられるよう条件が整えばよいですね。

（インタビュアー
西野留理子・長屋　純子・鎌田　清美）

from 「札響くらぶ」

会報「札響くらぶ」も10号となりました。歴代編集長をはじめご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

会員相互の情報交換の場として、札響がファンにとってより親しみやすく身近な存在になるよう、そしてより多くの方々に札響の演奏会においでいただけるように、この会報がいくばくかのお役に立ってきたならば嬉しく思います。

スタッフ会議では、くらぶの今後の活動として、当面次のような三つの企画を立てておりますのでお知らせします。

一つ目として、札響の練習見学会を11月３日に実施します。芸術の森の練習場で、尾高忠明さんによる11月定演の練習風景を見学させていただくことになりました。会員には後日ご案内をさしあげます。

二つ目は、次号の「札響くらぶ」（１月発行予定）は、札響の楽団員全員の写真名鑑とし、ファンの保存版にしていただこうという企画です。いつもステージの上でみかける楽団員の顔写真と簡単なプロフィールを掲載し、札響をより身近に感じていただければと思います。

三つ目は、「第２回札響くらぶコンサート」開催にむけて実行委員会が開かれ、具体的準備が開始されました。前回のアンケートなどでは尾高忠明さんの指揮でとの希望が多く、実行委員会としても尾高さんと札響の日程調整をお願いすることにしました。演奏会の曲目・内容などについては、今後会員の皆さんの意見を頂戴し、楽団員の方々を交えて決めて行きたいと思います。実行委員会のスタッフとして一緒に活動していただける方も歓迎します。どうぞ当くらぶにご連絡下さい。

札響くらぶはこんな活動をしています。入会は随時可能。一緒に札響を応援しませんか。

（事務局長　上田文雄）

FAN NETWORK

私のオーケストラ！

クラシック音楽など全く無縁で暮らしてきました。音楽といえば、流行歌や民謡の類で、交響曲だとかコンチェルトだとかは私とは別の世界のもの、と思っていました。

夫がたまに聴いている訳の分からない音楽にも、最初は親しみはもてませんでした。しかし、何年かたつと夫の聴く音楽が苦痛ではなくなり、いつしか親しみまで感じるようになりました。

そんなころ、夫に連れられて、生まれて初めてオーケストラの演奏会に出かけました。確か、「札響の第九」だったと思います。第一楽章が始まったときの驚きと感動は、今も鮮やかによみがえります。「ああ、これが音楽というものなのだ。」と、しみじみ思いました。

その後、テープでしか聴いたことのなかった「シェエラザード」を定演で聴いて、コンサートマスターのソロに酔い、キタラでのリハーサルの音に驚かされ、数え切れない感動を与えてくれた札響は、私にとってなくてはならない大切なオーケストラになりました。しかし、あくまでも札響は私にとっては雲の上の存在でした。

ところが、ある機会に、チェロのTさん、バイオリンのIさん、ビオラのMさんなどとお話しする機会を得、一気に札響が私にとって身近な存在になりました。コンサートの時など、私に気づいて微笑んで下さったり、軽くうなづいて下さることもあり、そんな時、つい、「札響は私のオーケストラだ」と心で叫んでしまったりします。

札響クラブの交流会でも多くの楽員の方を知り、ますますそういう気持ちが強まっています。今後ともあのような機会を持ち続けてもらいたいものと期待しています。　（江別市　N・S）

オーストラリアびいきの夢

高校で教鞭をとりながら、ボランティアで日豪親善に携わってきました。札響の定期会員になって約20年、それと同じ位の年月になります。

昨年８月、たまたまメルボルンのコンサートホールで、メルボルン交響楽団の演奏を聴く機会がありました。指揮者は今や世界的に有名になった、オーストラリアの女流指揮者シモン・ヤング。曲はウォルトンの交響曲でした。あまり聞いたことのない作曲家の曲で、どうかなと思いましたが、それは素晴らしい演奏で、感動しました。

帰国して、11月の定演に行ったら、尾高さんの指揮で同じウォルトンの交響曲。これにも感動しました。

そこで、オーストラリア大好き人間の私は考えました。「札響とメルボルン響が姉妹交響楽団になったら嬉しいな」と。

まんざら縁が無い訳でもないはずです。札響のかつてのコンサートマスター、マイケル・キシンさんはメルボルン響からいらした方ですし、桂冠指揮者岩城さんは今もメルボルン響の指揮者でいらっしゃるはずです。

姉妹交響楽団になって、ヤングさんが札響を振ったり、尾高さんがメルボルン響を指揮したり、両楽団が合同演奏をしたり…、考えただけでも楽しくなります。

ついでに、メルボルンのコンサートホールは、客席が地下に向かって広がっている、ユニークな設計で、音響効果も素晴らしいホールです。このホールとKITARAも、姉妹ホールになってくれれば、もう言うことなしです。

他愛のない夢でしょうかねえ。関係者の皆さん、考えていただけませんか。　（中央区　M・I）

編集後記

記念すべき10号です。今回も原稿担当の皆様のご協力で、何とか予定期日の発行にこぎ着けることが出来ました。感謝します。

楽員さんとの懇談では、いろいろ考えさせられることがありました。プロの方々とファンとの関係は、構えすぎてもいけないし、狎れあってもいけない。くらぶとしても考えていきましょう。

「FROM札響くらぶ」でも紹介されているように、次号は会長の発案により、「保存版　楽員名鑑」として発行予定です。どうぞ、ご期待下さい。　（佐藤良次）

次号の「札響くらぶ」は１月発行の予定です。